

湿地を訪ね、
湿地に学ぶ

湿学のすゝめ

宮城編



はじめに

名古屋市の南西部、3つの川（庄内川・新川・日光川）の河口部に広がる藤前干潟は、魚やカニなど多くの生き物が暮らす「生き物の宝庫」。地球を南北に1万キロ以上もの距離を旅する渡り鳥たちが羽を休める重要な中継地としても知られています。

30年以上前、ごみの量の増加に伴い藤前干潟をごみの埋立処分場にする計画が発表されました。しかし、名古屋市民の間で「ごみの減量に取り組み、身近な自然を守ろう」という機運が高まり、1999年1月に埋立計画は中止に。翌月に「ごみ非常事態宣言」が出され、市民総出でごみの減量に取り組むことになったのです。

こうして自然環境が守られた藤前干潟は、2002年11月18日に、ラムサール条約の「国際的に重要な湿地」に登録されました。以降、藤前干潟やその周辺では、干潟を守っていくための清掃活動や、干潟をもっと知るための体験イベントなど、さまざまな活動が行われています。

ラムサール条約登録から約20年。名古屋市内では干潟の保全活動をこれまで以上に促進するため、新たに「国内湿地交流事業」を実施することになりました。

「国内湿地交流事業」は、湿地や海岸を保全するため地域と連携して優れた取り組みを行っている国内のラムサール条約登録湿地を視察。そこで身に付けた知見を藤前干潟の保全活動に活かすことを目的とした取り組みです。湿地について学ぶことから「湿学」と名付けました。今後も継続的かつ体系的に学びを深めていきたいと考えています。

この報告書は、2021年12月に行った事前学習会に始まり、実際の現地視察を経て、総括として行った事後学習会までの事業の中で、他地域の湿地の取り組みから何を学び、藤前干潟の保全にどうやって活かすのか、派遣者の立場からまとめたものです。今後の環境施策の一助になることを願ってやみません。

List of Participant

参加者氏名

年齢も職業も違う10人が湿地について
ともに学び、この報告書を制作しました。

石原 則義	小出 恭司
大石 安純	小林 遼香
大毛利 一哉	田中 伸司
亀井 浩次	角田 涉
岸 晃大	松井 久二子

(50音順)

Contents

目次

はじめに	1
事前学習会・藤前干潟について	2
旅の記録	3
伊豆沼・内沼に学ぶ	4
志津川湾に学ぶ	5・6
蕪栗沼・周辺水田に学ぶ	7
蒲生干潟に学ぶ	8
事後学習会	9
おわりに	10



より深い学びのための準備



視察を前に派遣者が集まり学習会を行いました。学習会では「優れた取り組みを行っている国内のラムサール条約登録湿地を視察し、その知見を藤前干潟の保全活動に活かす」という事業の目的を確認。自己紹介を行い、それぞれが抱負を語りました。続けて、NPO法人藤前干潟を守る会理事長の亀井浩次さんとNPO法人海の自然史研究所事務局長の平井和也さんが講義を実施。藤前干潟や視察をする宮城の湿地についての理解を深めました。

事前学習会

市民によって守られた都会のオアシス

■ 日時：令和3年12月11日(土)
■ 場所：エコパルなごや パーチャルスタジオ
■ 参加者：派遣者10人

平井和也(NPO法人海の自然史研究所 事務局長)

まずは、藤前干潟の保全活動の歴史について。名古屋市の干潟を埋め立ててごみ処分場の建設計画を発表した際、「鳥の生息地を守ろう」と真っ先に声を挙げたのはバードウォッチャーたちでした。やがて、渡り鳥以外の生き物にも目が向けられるようになったそうです。

「干潟を掘ってみると、実に多様な生き物がいることが分かりました。泥の中を含めた命のつながり」

宮城の湿地を学ぶ意義

宮城にいる平井さんとはオンライン中継。所属のNPO法人海の自然史研究所では「海を知る。をみんなに」をテーマに、映画等のメディアを使ったり、ごみ拾いをしたり、イベント企画をしたりと多面的な活動を行っています。

そのうちのひとつが南三陸・海のビクターセンターと石巻・川のビクターセンターの運営。事前学習会では、今回訪れる南三陸・海のビクター

に気付く、「干潟の重要性はその生態系にある」という私たちの主張の根拠が生まれたのです」と亀井さん。

藤前干潟を守る会は2005年にNPO法人格を取得し、干潟の生き物調査や体験イベントの企画・運営などを行っています。

そうした活動と並行して取り組んでいるのが海洋ごみ問題。亀井さんは藤前干潟での清掃活動にも力を入れて取り組んでいるとした上で、

センターが立地する志津川湾の自然環境からスタートして、他の視察先の湿地がそれぞれどのような特徴をもっているのか、見どころや学びのポイントなどを分かりやすく丁寧に解説してもらいました。

海の中の写真は、まるで森のように海藻・海草が一面に繁茂していて、どうやら植生に秘密があるようです。一方、山から海に飛んで来るオオワシの写真や越冬するコクガンの鳴き声、いつせいに飛び立つマガンの映像も。名古屋とは違う自然環境

次のように話しました。

「干潟にあるごみは拾うしかありませんが、解決にはなりません。社会全体で使い捨てのプラスチックを減らせるよう、取り組みを進めたいと思います」

の様子を見ることができ、学習意欲も高まります。



命がつながる藤前干潟

世界的に重要な渡り鳥のフライウェイ

藤前干潟の特徴はゴカイや貝類、いろいろなカニなどの底生生物が豊富にいること。そしてそれらをエサとする渡り鳥の中継地であることです。北半球のシベリアで繁殖し、越冬をするため南半球のオセアニアへと向かう渡り鳥のフライウェイ(渡り鳥のルート)にあり、途中で立ち寄って羽を休める場所となっています。藤前干潟へやって来る渡り鳥はハマシギやダイゼン、ダイシャクシギなど。その数は年間2万羽以上だと言われています。

藤前干潟に暮らす生き物たち



ヤマトオサガニ



ハマシギ
名古屋市野鳥観察館提供



ダイゼン
名古屋市野鳥観察館提供

旅の記録



1/15 Day 1

- JR 名古屋駅
- JR くりこま高原駅
- 宮城県伊豆沼・内沼
- サンクチュアリセンター
- (公財)宮城県伊豆沼・内沼
- 環境財団・嶋田さんの講話
- 伊豆沼・内沼見学
- マガンのねぐら入り観察
- 南三陸まなびの里いりやど

1/16 Day 2

- 南三陸まなびの里いりやど
- 入谷の山トレイルウォーキング
- (南三陸まなびの里いりやどにて)
- 南三陸町自然環境活用センター
- 同センター・阿部氏の講話
- 南三陸・海のビジターセンター
- 同センター・平井氏の講話
- 志津川湾の生物観察
- 南三陸町震災復興祈念公園
- 震災遺構(旧防災対策庁舎)を訪問
- 南三陸まなびの里いりやど

Special Thanks!

お世話になった人々

- NPO法人藤前干潟を守る会
亀井浩次さん
- NPO法人海の自然史研究所
南三陸・海のビジターセンター
平井和也さん
- NPO法人海の自然史研究所
今宮則子さん
- 公益財団法人宮城県
伊豆沼・内沼環境保全財団
嶋田哲郎さん
- 南三陸町自然環境活用センター
(南三陸ネイチャーセンター)
阿部拓三さん
- 宮城県大崎市産業経済部
世界農業遺産推進課
三宅源行さん
- 蒲生を守る会
熊谷佳二さん
- おきなくら EELs の
みなさま
- 南三陸まなびの里
いりやどのみなさま

お世話になった施設

- 宮城県伊豆沼・内沼サンクチュアリセンター
宮城県栗原市若柳上畑岡敷味 17- 2
<http://iz.muma.org/>
- 南三陸町自然環境活用センター
宮城県本吉郡南三陸町戸倉沖田 69- 2
<https://www.wtownmi.ami.sari.kumi.agi.j.p/dex.cfm/8,0,39,390.html>
- 南三陸・海のビジターセンター
宮城県本吉郡南三陸町戸倉阪本 21- 1
<http://kawatoumi.avisitorcenter.jp/umi/>
- 南三陸まなびの里いりやど
宮城県本吉郡南三陸町入谷鏡石 5- 3
<https://ms-iyado.jp/>



1/17 Day 3

- 南三陸まなびの里いりやど
- 大崎市田尻総合支所
- 大崎市産業経済部
- 世界農業遺産推進課・三宅氏の講話
- 蕪栗沼・周辺水田の生物観察
- 蒲生干潟
- 蒲生を守る会・熊谷氏の講話
- 蒲生干潟の生物観察
- JR 仙台駅
- JR 名古屋駅

長期的な視野に立ち、渡り鳥の楽園を保全

伊豆沼・内沼は、渡り鳥の越冬地として知られている国内有数の湿地です。公益財団法人宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団研究室長の嶋田哲郎さんの講話を聞いたほか、観光の目玉であるマガンのねぐら入りを見学。豊かな自然を守るための活動について、実体験を通じて学びました。

伊豆沼・内沼の特徴は、水深が平均80cmと浅いこと。そのため沼の中央部にも水生植物が生い茂り、魚や貝のほかトンボをはじめとする水生昆虫など、多種多様な生き物が生息しています。夏には湖面いっぱいにはスの花が咲き誇り、冬にはオオハクチョウやマガンなどの渡り鳥が飛来するなど、四季折々でさまざまな風景が見られる、まさに「自然の宝庫」です。



「生態系を維持しつつ、人類の利益のために湿地を持続的に利用すること」を意味する「ワイズユース」という考えのもと、沼に生息する生き物たちの生態系を守りつつ、多くの人が訪れてもらえるよう観光にも力を入れて活動していることを学びました。

ワイズユース観光地

環境保全に近道なし

嶋田哲郎さんによる講話は、とても興味深いものでした。中でも印象に残ったのが、自然環境保全活動についての話。1996年以降、外来種のオオクチバスが増え、在来の魚や渡り鳥の数が減少したことから、嶋田さんらはオオクチバスの駆除活動を開始。試行錯誤の結果、電気ショックカーポートという機械でオオクチバスを気絶させ、掬い取る方法を見つけました。これにより、オオクチバスの個体数は減少。在来の魚や渡り鳥の数は元に戻ったそうです。

また、ハスが増え過ぎて、沼の水が汚れていることも問題に。嶋田さんらはハス刈り口ボットボートを使って、適正な数となるようハスの管理を行っています。



冬の伊豆沼・内沼観光の一番の見どころが「マガンのねぐら入り」。エサを求めて早朝に飛び立った数万羽のマガンが、日の入り前後の20〜30分にねぐらへと戻ってくる様子のことです。5〜8羽の家族単位でV字型の隊列を組み、飛んで来たマガンたちが、ヒラヒラと舞い落ちるようになぐらである伊豆沼・内沼へと急降下する姿は、感動的でした。



感動的なねぐら入り

早朝にマガンたちが向かうのは沼の周囲にある水田。初や草など、豊富なエサを食べながら日中を過ごしているそうです。農家が沼の周辺で米作を行っていることが、実はマガンの保全にも繋がっているというところを、この目で見て感銘することができました。

1日目

伊豆沼・内沼に学ぶ

- 所在地：宮城県栗原市、登米市
- 面積：559ha
- 湿地のタイプ：淡水湖
- 保護の制度：国指定鳥獣保護区特別保護地区
- ラムサール登録：1985年

Wetland Report

渡り鳥が集まる理由

渡り鳥はなぜ、伊豆沼・内沼に来るのでしょうか。理由はいくつか考えられますが、①冬でも湖面が氷結しないから②広大な水田があるから③水深が浅いから——という3つが主な理由です。水田の初や草といったエサが豊富にあり、キツネなどの天敵に襲われる心配がありません。渡り鳥にとっては、まさに楽園です。

鳥の行方を衛星で追跡

渡り鳥はどこから来て、どこへ行くのかという疑問解消のため、嶋田さんらは、衛星送信機を鳥に装着して追跡する「アルゴシステム」を導入。オオハクチョウなどの渡りの様子を調べました。オオハクチョウは極東ロシア北部、マガモは極東ロシア南部や中国北部、オナガガモは北海道…。鳥の種類によって渡り先が違ってくるのが分かりました。

3つのサンクチュアリセンター

伊豆沼・内沼周辺には「宮城県伊豆沼・内沼サンクチュアリセンター（鳥館）」「栗原市サンクチュアリセンター・つきだて館（昆虫館）」「登米市伊豆沼・内沼サンクチュアリセンター（淡水魚館）」という施設があります。いずれも、標本や沼の生態展示が充実。伊豆沼・内沼に生息する生き物全般のことなどを楽しく学べます。

海と山、海と人との密接な繋がりを実感

2日目は、「海藻の森」や「海草の草原」が広がる志津川湾のほか、入谷の山、南三陸・海のビクターセンターを訪れました。「森里海ひと いのちめぐるまち」という南三陸町のキャッチフレーズの通り、山や里、人と密接に繋がり、恵みを楽しむことで、豊かな海が保たれていました。

複雑に入り組んだリアス海岸として知られている三陸海岸の南部にある志津川湾。ラムサール条約登録は2018年と比較的最近ですが、9つの国際的な登録基準のうち国内最多に並ぶ5つを満たしています。

寒流の親潮、暖流の黒潮、日本海を北上する対馬海流から枝分かれした津軽暖流の3つの海流が混ざり合っているのが特徴。そのおかげで冷たい海に生息するマコンブと暖かい海で見られるアラメの両方の藻場があり、約220種類の海藻が生息する貴重な海となっています。

エサとなる海藻・海草を目当てにやってくる、コクガンのほか、オオワシ、オジロワシなどの希少な渡り鳥が多く、豊かな生態系を形成しています。湾内には多数の養殖いかだが浮かび、カキ、ホタテ、ホヤ、ワカメ、ギンザケなどの魚介類を育てていました。



3つの海流が流れ込む

山の豊かさが海の豊かさに

視察の2日目は山歩きからスタート。湿地のことを学びに来たのに、山歩きをしている場合ではないのでは…。そう思われる方がいるかもしれませんが、実は山の自然環境を保全することは、海の環境を守るためにも大切なことなのです。

入谷の山は志津川湾から数キロほどの距離にあり、湾を抱くようにそびえる山々。入谷の山で目にしたもののひとつが、志津川の源流です。透き通るような色をしています。山の栄養分をたっぷり含んでいます。この流れが南三陸の町を通り、やがては志津川湾へと注ぎ込んでいくのだとか。山の栄養分が湾内に生息する水生生物にもしっかりと届いているのです。志津川湾でイキのよい魚介類が捕獲できるのは、入谷の山のおかげ。海と山には密接なつながりがあるということを実感する貴重な体験となりました。

湿地について学ぶ旅は、森林の管理、間伐について、担い手の問題：思わぬ切り口から学びが広がってきます。



「みちのく潮風トレイル」のウォーキングを案内してくださったのは、「おきなくらEELS」のみなさん。若い世代を中心に、「自然体験活動リーダー（NEAL）」の資格を持ちトレーニングを重ねたメンバーで、自然体験プログラムを提供するためにスキルアップやレスキューなどのトレーニング、リスクマネジメントの研修や、自然・環境についての勉強会を実施されているそうです。地域の魅力を語る姿は生き生きとしました。

伝承に触れる

入谷の山は仙台藩の養蚕発祥地。シルク生産で栄えました。柳田国男によってまとめられた『遠野物語』で有名な岩手県の遠野に匹敵するほど民俗伝承が多く残る地域です。ガイドの中では恐ろしい妖怪たちの話を聞き、ふしぎなことが日常生活の中に溶け込んでいるのを感じました。嘘つきが通ると挟まれてしまう…と噂の地域信仰の対象である「巨石」は、自信のある人だけくぐりましょうね。

海と山との繋がりを感じる

2日目の午前中は、当初は、沿岸部のトレイルを実施する予定でした。しかし、前夜に起きたトンガ沖改定火山大噴火の影響によって津波注意報が発令され、海に近づくことができませんでした。そこで急遽手配いただいたのが入谷の山のトレイルウォーキング。おかげで、海と山の関係に触れることができました。「けがの功名」とはまさにこの日のことでしょう。昼過ぎには注意報が解除され、天然記念物のコクガンも無事に観察できました。

2日目

志津川湾に学ぶ

- 所在地：宮城県南三陸町
- 面積：5793 ha
- 湿地のタイプ：海洋の潮下帯域（水中植生）
- 保護の制度：国立公園 海域公園地区
- ラムサール登録：2018年





研究成果を地域で活かす

南三陸町自然環境活用センター博士の阿部拓三さんからは、研究とラムサール条約登録への道のりについて伺いました。

例えば、コクガンに衛星送信機を装着してどこへ向かっているのかを衛星で追跡することで渡り先を明らかにした研究。

また、藻場が衰退する磯焼けの原因を究明したところ、ウニの繁殖が影響していることが判明。ウニの除去実験を行い藻場が回復したところ、渡り鳥も戻ってきたそうです。このほか、CO₂を吸収するとい

自然こそが一番の教材

NPO法人海の自然史研究所の平井さんには、南三陸・海のビジターセンターを案内してもらいました。同センターが目指しているのは「フイールドミュージアム」。外へ出て実際に体験してみることが主眼に置いて、先の「おきなくらEELS」の活動をはじめ力ヤックやパドルボードを使った体験型のプログラムを開催できるように艇庫や作業ヤードが整備されています。とくに驚かされたのが、調理室を併設していること。講師には魚屋さんを招き、志津川湾で獲れた海の恵みを

う海藻の特性を活かしてブルーカーボン事業を行ったり、子どもエコクラブと協働して湾内の生き物の研究保全を行ったりするなど、革新的な取り組みも興味を引きました。

ラムサール条約登録までには、研究成果の整理や行政の管轄の課題などの苦労があったそう。それらを経て、阿部さんは「私たちを取り巻く自然環境の大きな変化に対して、正面から向き合い観測して記録することが重要。そのためには地域の目で見る必要がある。」と言われました。記録の担い手は、研究者や行政にとどまらず子どもたちを含む地域の人々だということ。遠くに思え

すぐに調理して味わうことが可能で、食と切り離しては語れない「生物多様性の恵み」を、一般の人にも分かりやすくダイレクトに伝えることができるのではないのでしょうか。

ホールにはトピックごとに選択再生できる映像や生息地に集う生き物を描いたイラストパネル、地元岩手の漁師さんたちの個性的なプロフィール紹介（ー）など、楽しく学べる工夫がいっぱい。どの展示からもスタッフの方々の熱意を感じられ、まさに「自然こそが一番の教材」という通りの親しみ深い施設でした。

た「研究」を身近に感じました。



海に面した立地のためすぐ隣に背の高い防潮堤があり、当初は海が見えない構造だったところ要望を受けて造られた2階のテラスからは志津川湾が一望できます。夕暮れの静かな海の、水面の下に広がる海の森に思いを馳せ2日目が終わりました。



Wetland Report

ビジターCにカフェを併設

南三陸・海のビジターセンターにはカフェコーナーが併設されています。自然のことや環境のこと、未来についてなどコーヒーを飲みながら、仲間と一緒にリラックスして会話をすれば、平井さんが話していた通り「楽しみながら学ぶ」ことができそうです。

ASC認証の絶品カキ井

宮城県漁業協同組合志津川支所のカキ養殖業者は、「ASC 認証」の第1号の認証業者です。「ASC 認証」とは、養殖に関する国際認証制度のこと。環境に負担をかけず、地域社会に配慮して、操業をしている養殖業に対してお墨付きが与えられます。そのカキを使った絶品のカキ井を、カフェ「ちょこっと」さんのお昼で味わいました。

コクガン43番の旅

共同研究のひとつ。2020年5月1日、衛星送信機を付けた43番のコクガンが志津川湾を出発しました。2カ月ほどかけて北上し、オホーツク海、ロシア内陸部を横断して北極海沿岸まで到達し、そこで幼鳥羽から成鳥羽へと換羽しました。飛んでいる時のコクガンの時速は50～80キロ、標高3400メートルの高山も超えるのです。

渡り鳥が羽を休め、ブランド米が収穫できる水田

蕪栗沼とその周辺水田はひとまとまりの湿地生態系としてラムサール条約に登録されています。蕪栗沼をぐるっと取り囲むように見渡す限りに水田が広がっている様子は圧巻。大崎市産業経済部世界農業遺産推進課の三宅源行さんのお話を伺いつつ、広大な湿地を歩きました。

録は初めての事例。人間の営みと密接に関わる水田が渡り鳥にとって重要な場所であることが世界中に示されることになったのです。



かつては1000haを超える広大な沼だった蕪栗沼。洪水や氾濫がたびたび起きたために300年以上も前から新田開発が行われ、沼は水田に姿を変えました。それでも洪水や氾濫が収まらないことから再び沼が復元され、その周囲が水田となったのです。現在の蕪栗沼の面積は164ha。259haの周辺水田と合わせて423haの広大で肥沃な「大崎耕土」が広がっています。

世界で初めて水田を登録

ふゆみずたんぼで二石二鳥

環境教育も熱心に

3日目 蕪栗沼・ 周辺水田に学ぶ

- 所在地：宮城県栗原市、登米市、大崎市
- 面積：423ha
- 湿地のタイプ：堰止湖、低層湿原、水田
- 保護の制度：国指定鳥獣保護区特別保護地区
- ラムサール登録：2005年

行政は、助成金交付や普及活動などにより農家の積極的な協力を取り付け、農業に付加価値を生み出したのです。



渡り鳥としてやってくるマガンとの共生は簡単ではありませんでした。マガンは、稲を食べてしまったら、水質汚濁の原因となったりする害鳥と考えられていたのです。マガンと農家が共生する方法を模索した大崎市は2003年から「ふゆみずたんぼ」の取り組みを始めました。

大崎市では1997年から各小学校とNPO団体が連携して環境学習を推進しています。市内にはエコクラブが複数あり、エコクラブ同士の交流が限られた地域から他の地域へ赴く目的になっているという点が先進的で、魅力的でした。



イベントでは子どもたちの発表の場を与えているほか、交流学習会に子どもたちを派遣することも。2013年からは、特に生き物が好きだという子を対象にした、校外活動も実施しています。プログラムは、NPO7団体と共同して構成。市内の全小中学生向けに環境イベントの広報チラシを配布するなど、情報提供を一元化して、次世代に繋げるための活動を行っています。

次の世代の担い手は着々と育っているようです。

Wetland Report

マガンがモチーフのパタ崎さん

大崎市のマスコットキャラクターはくりっとした目と黄色いくちばしが印象的な「パタ崎さん」です。モチーフとなっているのは、マガン。数多く飛来することから、マガンをキャラクター化することになりました。「(一般的な)ハクチョウではないのがいいところ」とは三宅さんのコメント。大崎市らしき全開のキャラです。

ふゆみずたんぼ米で極上の地酒

「ふゆみずたんぼ米」は、無農薬の有機栽培なので安心して口にすることができる上、味もおいしいと大評判。関係者の地道な努力が実を結び、ブランド化に成功しました。食用はもちろん、日本酒の材料にも適しているため、ふゆみずたんぼ米で醸造した地酒も販売されています。

膨大な数の野鳥に驚き

広大な湿地を散策し、野鳥を観察しました。とにかく野鳥の数が多い!どこを歩いても鳥の姿が目に入り、鳴き交わす声があちこちから聞こえました。派遣者も持参した双眼鏡やカメラを離さず夢中です。宿から蕪栗沼へ移動する道中の水田にも食事をする群れがいっぱい。賑やかで明るい冬の風景が見られました。

藤前干潟との共通項が多い都市型湿地

蒲生干潟は宮城県仙台市にある小さな干潟。シギ類やチドリ類などの渡り鳥の中継地として知られていますが、ラムサール条約には登録されていません。それでもあえて訪れたのは、藤前干潟と状況が似ているから。現地を視察しながら、蒲生を守る会の熊谷佳二さんにお話を伺いました。

※「蒲生干潟自然観察ガイドウォーク」より



物たちが織り成すバランスと自然の生命の鮮やかさ・力強さを感じました。

2011年3月11日に発生した東日本大震災により、仙台港にある蒲生干潟も壊滅的な被害を受けました。干潟に生息していた動植物はほとんどがその姿を消したかのように見え、「沈黙の干潟」は「復元不能」と報道されました。

しかし、翌月の4月には早くも砂がつき始め、7月には元の状態に近づき底生動物も目立つようになり、10年経った今では「人間の予想を超える速さで回復の兆しを見せ、よみがえりつつある」(※)そうです。

東日本大震災からの復興

印象的だったのは干潟と町の間にある巨大な防潮堤。東日本大震災復興事業として、宮城県による巨大防潮堤工事と仙台市の蒲生北部土地区画整理事業が行われてきました。当初の工事計画では、具体的な環境配慮の取り組みや環境保全対策が盛り込まれていなかったため、保全を訴える要望書が提出されています。工事はセッバックを含む2回の修正のうえ着工されたものの、干潟への直接的な影響は避けられていないそうです。



保全と防災の狭間で

「蒲生を守る会」は1970年、市民有志により、仙台港建設のための干潟の埋立計画に反対するために結成されました。粘り強い運動の結果、干潟の3分の1が残され、その後も地道な活動が行われています。震災直後の干潟の再生状況をはじめ、客観的な数字や継続的な調査によって示される記録は、蒲生干潟だけでなく、他の湿地にとっても重要な資料となるでしょう。

会では、鳥類調査を毎月定期的実施しているほか、自然観察会の運営や会報誌『蒲生を守る会だより』、活動50年記念誌『蒲生干潟の現在(いま)2011-2019』の発行、行政への提言や要請など、さまざまな活動を行っています。熊谷さんたちの行動力が強く印象に残りました。



地道な活動で自然を守る

3日目

蒲生干潟に学ぶ

- 所在地：宮城県仙台市
- 面積：48 ha
- 湿地のタイプ：干潟・汽水域・砂浜
- 保護の制度：国指定鳥獣保護区特別保護地区
- ラムサール登録：未登録

Wetland Report

蒲生干潟との共通点

蒲生干潟を視察した理由は、港湾部・工業地帯に位置する干潟であることや、市民らの運動によって埋立計画が変更された過去があるなど、20年以上前、つまりラムサール条約登録以前の藤前干潟との共通項が多くあったため。また、蒲生干潟は仙台市の中心から10キロほどの距離にあり、仙台駅までは車で30分ほど。名古屋駅から藤前干潟までの距離と大きく変わりません。こんなところもよく似た干潟です。目の前に広がる光景は、守られなければ消えてしまっていたのです。ここから未来に向けて、私たちは何ができるのでしょうか。強い風の音を耳に残して、私たちは仙台を後にしました。

日本一低い山

蒲生干潟のすぐ横には日本で一番低い山があります。その名は日和山(ひよりやま)。標高はなんと3メートル。立て看板には「3000mm」と表記されていました。仙台市民から愛されている遊び心満載の山です。干潟への影響を減らすためにセッバックした結果、日和山が残されました。

学んだことを活かすために

視察を終えた2週間後に、名古屋で事後学習会を開きました。学習成果を思い思いに発表。全員の意見を共有したうえで、今後、藤前干潟においてどのような保全活動を展開できるのかを話し合いました。最後は、海の自然史研究所事務局長の平井和也さん、藤前干潟を守る会理事長の亀井浩次さんが、今回の事業を総括。さらなる取り組みの発展に期待を寄せました。

事後学習会

日時：令和4年1月29日(土)
場所：エコバルなごや パーチャルスタジオ
参加者：派遣者10人
平井和也(NPO法人海の自然史研究所 事務局長)

長期的視点を持つことを再認識

事後学習会では、参加者が視察したそれぞれの湿地の感想や3日間で学んだことなどを思い思いに発表していきました。

初日に訪れた伊豆沼・内沼について多くの参加者が口にしたのが「活動のモチベーションは元(本来の湿地の姿)を知っているから」という伊豆沼・内沼環境財団の嶋田さんの言葉について。「元の風景を取り戻すという強い意志を感じ

先駆的な活動に気持ちを新たに

最終日に訪れた蕪栗沼では環境保全型の「ふゆみずたんぼ」という目新しい農業スタイルが参加者に印象深く残ったようです。それに合わせて次世代へ繋ぐ活動にも注目が集まりました。子どもたちが自然と触れ合うことができる生き物クラブの取り組みについて「環境教育を地域の保全団体と行政が一緒に進めるのは、なかなかできないこと」と評価する声があ

た「素晴らしい言葉に感銘した」などの意見が出ました。

伊豆沼・内沼では電気ショックカーポートを使ってオオクチバスを駆除するなど、さまざまな工夫を凝らした環境保全活動が行われています。「効果があるかどうか最初から分かっていただけではないが、試行錯誤と長期的な取り組みが効果を生んだと思う」という嶋田さんのコメントに10年後を見据えて取り組むことの大切さを認識したようです。

ありました。

また、仙台市にある蒲生干潟では「20年前の藤前干潟の状況と似ている」との指摘もあり、参加者にとって学ぶべき点が多かった様子。地元市民団体が50年間で活動していることに「困難にぶつかっても理想を求めて前に進む姿を見て、私たちも勇気が出た」と敬意を表する声も。藤前干潟の環境保全活動を推進していくうえで、大きなモチベーションとなったようです。

地域と保全の関わりを参考に

志津川湾の視察で参加者の印象に残ったのが、地域と環境保全の関わりについてでした。

養殖の牡蠣井や、湾内でのシーカヤックの体験など、志津川湾は観光地としても魅力的な場所。同時に、地域に根ざした研究のあり方も学び、「さまざまな海の恵みを活用した先進的な取り組みが参考になった」「地域での地道な取り組みが成果につながっている」と

面白い学びで社会を変える

リモートで参加した南三陸・海のビクターセンターの平井さんは、今回の視察をコーディネートしたことについて「県内の湿地・干潟を繋げて2泊3日の行程を作ったのは初めてだが、とても充実した企画になった」とコメントしたうえで、「今後こうした取り組みが定常的なものにならないか内部で検討している」ことを明らかにされました。

いった意見が。

また、「自然体験ガイドをしている『おきなくらEELS』の活動の盛り上がりで環境保全活動が身近な存在になっている」「活動を手伝う若い漁師も地元で生計を立てられていることが大きいと思う」など、地域住民たちが熱心に志津川湾の環境保全活動を行っていることについて、「藤前干潟での活動のヒントにしたい」との声が多く聞かれました。

続けて平井さんは「面白そうながいるということを引きつかけに興味を持ってもらい、そこから学んで刺激を受けることが重要だと考えている。面白さから入り、学んで出るといふサイクルを作り、遊びにくる人に面白い学びを提供することができれば、社会を変化させることができる」と締めくくりました。





事後学習会では、藤前干潟の保全活動についての意見交換も実施。視察先のそれぞれの湿地における視察結果を踏まえて、すぐにでもできそうなこと、いつかは実現したいことなど、さまざまな提言がありました。

いつか実現したいこと

整備

- ・歩道の整備、バスの増便やシャトルバスの運行、公共交通機関の誘致などでアクセスを改善する。
- ・南三陸・海のビジターセンターにあったようなカフェコーナーを、藤前干潟の2つのセンターにも設置。リユースコップや紙ストローなどを活用して誘客する。
- ・渡り鳥の様子を観察・学習できる場所として、さらに施設を充実させる。

連携

- ・藤前干潟と成り立ちや規模の似た湿地・干潟を探し出し、兄弟湿地・干潟提携を締結する。
- ・他地域にも展開できるような湿地カード、バッジなどのグッズを制作し、来場者に配布する。
- ・名古屋城→熱田神宮→藤前干潟→名古屋港水族館→東山動植物園の観光ルートを整備し、藤前干潟をなごやの観光名所にする。
- ・環境活動に力を入れている企業や団体とパートナーシップを結ぶ。
- ・藤前干潟の上流にある小幡緑地・東谷山の森の保全団体と提携して、共に保全活動に取り組む。

教育

- ・修学旅行や社会見学のコースを設定。名古屋市以外の児童・生徒に実際に足を運んでもらう。
- ・学生など若い世代が関わりやすい都会の立地を活かし、清掃ボランティアといった活動への参加を促す。
- ・自分が教員になった時に、藤前干潟で環境教育を行う。

すぐにできそうなこと

伝える・学ぶ

- ・市民の間での認知を高めるために、藤前干潟の魅力や保全活動の内容をリーフレット作成・SNSで発信・告知する。
- ・あおなみ線の名古屋駅などの公共施設で映像を流し、藤前干潟の魅力を発信する。
- ・今まで以上に藤前干潟を訪れ、渡り鳥の観察記録をつけて、藤前干潟の渡り鳥の中継地として写真を含めて今の藤前干潟の姿を記録していく。
- ・昔の藤前干潟の姿を知っている人から、昔の藤前干潟の渡り鳥の飛来状況や底生生物についての生息状況について聞く。
- ・大学のゼミで環境配慮行動について学び、もっと多くの人に藤前干潟の保全活動を広めたい。

活動する

- ・水源である庄内川・日光川を汚さないようにする。
- ・庄内川を介して藤前干潟につながっている小幡緑地や東谷山の保全活動に参加する。
- ・藤前干潟クリーン大作戦など、藤前干潟で開催されるごみ拾いのボランティアや各種イベントへ積極的に参加する。
- ・まずは自分の身の周りから積極的に藤前干潟をアピールして、興味を持って来てくれる人を増やす。



まとめ

「今回お手伝いいただいた4人の講師が口を揃えて『参加者のリアクションがよく、たくさん情報を伝えることができてうれしかった』と話していたのが印象的です」。今回の事業で視察先のコーディネートをお願いした平井さんが事後学習会で話してくれたこの言葉が、今回の「国内湿地交流事業」の「交流」の部分が、いかに充実したものであったのかを表しているのではないのでしょうか。3日間をとおして、講師の方のお話が野鳥の行動を観察したり湿地を歩いたりする体験と地続きになり、自らの生きた知識になるのを体感しました。課題への向き合い方や保全の手法など、私たちは今回の視察で得た知見を、藤前干潟の環境保全に大いに役立てていきたいと考えています。1年後なのか10年後なのか、いつになるかは分かりませんが、必ず花開かせられるよう取り組んでいく所存です。



令和3年度国内湿地交流事業報告書

発行／名古屋市環境局

〒460-0008 名古屋市中区栄一丁目23番13号 伏見ライフプラザ13階

TEL 052-223-1066 FAX 052-223-4199

発行年月／令和4年3月